

『嘉興蔵』と江戸仏教
—鳳潭『扶桑蔵外現存目録』を中心に—

王 芳

1 はじめに

江戸時代における中国書籍の流布の概況について、一つの例を挙げよう。正徳四(1714)年から安政二(1855)年までの142年間に、6136種57204部の書籍が日本に輸入されたという¹。人気作は輸入後まもなく国内で翻刻・出版されることもあったという²。徳川時代の中国書籍流布の広さと速さは想像以上であったと思われる。

中国書籍の中でも仏教典籍は、その時でもまだ日本人の大切な読み物であった³。このような仏教典籍の中で、特に刊本大蔵経の輸入は従来明らかにされていた以上の規模であったことが、次第に明らかにされつつある。(1)大庭修氏の研究によれば、1654年の隠元禅師の渡来とともにもたらされた『嘉興蔵』は、決して最初のものではなかった。享保四(1719)年から寛保元(1741)年まで僅か22年間に、輸入記録に残された明版大蔵経、いわゆる『嘉興蔵』は7セットにも及ぶ⁴。(2)章宏偉氏の研究によれば、上記期間にその数は7セットではなく9セットもあったとされる⁵。(3)野沢氏の論文によれば、『嘉興蔵』は「江戸時代全体を通じて30歳以上」が輸入されていたことは確実である⁶。したがって日本で『嘉興蔵』が流布したことは、まさに中国書籍輸入の盛況を反映した好例であり、それは日中仏教交流史上の高峰であると考えられる⁷。

確かに、日本における『嘉興蔵』の影響力は以前の刊本大蔵経に比べられないほど大きかった。江戸時代には仏典が広く普及した。そして『嘉興蔵』はその普及過程において、

¹ 大庭修 [1967: 227] による筆者の統計である。その他、江戸時代の向井富が編纂した『商船載来書目』(1804年編、日本国立国会図書館蔵)では、元禄六(1693)年から文化元(1804)年までの112年間に、「4982種書名」が所収された(王勇・大庭修 [1996: 116])。

詳しくは、大庭修 [1967][1972]、王勇・大庭修 [1996: 97-175]、大庭修 [1998: 403-408] を参照。補充説明であるが、大庭修 [1967] は、〈研究篇〉と〈資料篇〉に二分される。その後〈研究篇〉の内容を修正し、前著出版後の研究成果を加え、『江戸時代における中国文化受容の研究』という研究書は1984年に同朋舎により出版された。この中訳本(威印平・王勇・王寶平訳)は、『江戸時代中国典籍流布日本之研究』という書名に変更され1998年に杭州大学出版社から出版された。

² 例えば、『清嘉録』は、蘇州で道光十(1830、天保元)年「六月以降に刊行され、その年末には乍浦に運ばれ、長崎への貿易船に積み込まれ、十一月末か十二月半ばか遅くとも正月二日には長崎に到着し、三月には江戸の書肆に並んでいたことになる…清朝の文化が一年足らずのうちに日本に波及したことになる」という。なお、十年後再び江戸・大阪でそれぞれ翻刻されたという。松浦章 [2011b] を参照。

³ 例えば、松浦章 [2011b: 373] には、明末の書『全浙兵制考』の附録『日本風土記』巻一に、彼の時の日人は「古書、五経則重『書』、『禮』而忽『易』、『詩』、『春秋』、四書則重『論語』、『学』、『庸』而忽『孟子』。重佛經、道經。若古醫書、每見必買、重醫故也」とされる。弥吉光長 [1988: 119] には、江戸時代の出版物は儒家の経書と仏書が多く占められたと示唆される。

⁴ 大庭修 [1998: 405]。

⁵ 章宏偉 [2011: 56]。

⁶ 野沢佳美 [2002: 169]。

⁷ 章宏偉 [2011: 58]。

天海版・鉄眼版の版元となったことをはじめ、多方面で大いに影響を与えたことが明らかにされている⁸。

本稿は、まず『嘉興蔵』の特色と日本で広く流布するに至った歴史的状況を述べ、今までの調査による日本や北京故宮の9種類の『嘉興蔵』目録をまとめ、構成が極めて複雑な嘉興蔵の成立の段階を検討する。その上で、江戸学僧である鳳潭僧濬(1659-1738)の『扶桑蔵外現存目録』を取りあげ、『嘉興蔵』の「続蔵」と「又続蔵」部分における一部の典籍が単行本として日本で流布した状況を紹介し、この角度から江戸仏教における『嘉興蔵』の影響力を改めて確認する。

2 『嘉興蔵』の特色と先行研究

2.1 『嘉興蔵』の特色

1. 今までで別名が最も多い蔵経である。

中国では、『径山蔵』『嘉興蔵』『方冊蔵』『萬曆蔵』『密蔵本』『楞嚴寺蔵』と呼ばれ、日本では、上記以外に『明版嘉興蔵』『明蔵』『明版大蔵経』などとも呼ばれる⁹。

2. 開板と終了の年をめぐる論争が続く大蔵経である。

開板について、万曆十七(1589)年に始まるという説もあり、これより早いとする考えもある。終止年について、康熙五十(1711)年前後という説、嘉慶十二(1807)年と嘉慶年間(1796-1820)という説が示すように、見方にはかなりの違いが存在する¹⁰。

3. 構成に関する複雑さは前例がない。

販売することができしかも流通性がよい。流通しながら追加がなされた私版蔵経であり、板木を保存する場所と販売する場所の変遷が夥しい。最初に彫った板木が腐食したため再彫するなど多岐にわたる理由で、『嘉興蔵』は流動的・持続的に内容を更新し、現存するものはいずれも全蔵とは言えない。開板から止刻まで全てで幾つの典籍が印造されたのか、いまなお謎である。したがって各目録の間に差異があり、目録と現存する蔵経の間にも差異がある¹¹。

4. 内容上、取められた典籍は中国歴代刻本大蔵経の中で最大といわれ、又、その「続蔵」「又続蔵」に収録された500部以上の中国撰述典籍は、学術的価値があるといわれる¹²。

5. 形式上、経折装から方冊に変わり、利便性が高められ、値段も安価であった。

供養・功德のために流通と読誦の必要性が重んじられ、民間印坊で経典が刊行され、後世に大きな影響を与えた¹³。

⁸ 野沢佳美 [2001] を参照。天海版・鉄眼版の版元そして他の覆刻和本の版元でもあり、多くの寺院に収蔵されるなど三つの影響があげられる。

⁹ 章宏偉 [2005: 541]。

¹⁰ 章宏偉 [2005]、李富華・何梅 [2003]、釈法幢 [2014] を参照。

¹¹ 章宏偉 [2005: 544][2011: 56]、韓錫鐸 [2008]、王蕾・韓錫鐸 [2009][2011][2012] を参照。

¹² 藍吉富 [2004a][2004b]、何梅 [2005]。

¹³ 方広鋁 [1998b: 29]。

2.2 先行研究

代表的なものを列挙する。『嘉興藏』の日本への輸入事情について、先駆者である日本の学者では、大庭修 [1967] [1972] [1996] [1998] が、船載記録によって日本への『嘉興藏』輸入状況の一角を明らかにしている。章宏偉 [2011] は、大庭氏の研究成果を踏まえ、宮内庁が所蔵する船載書目を参考にして、上記のように享保四 (1719) 年から寛保元 (1741) 年までの『嘉興藏』輸入部数は9部にも至ったことを明らかにしている。野沢佳美氏は長年にわたり大藏経研究に没頭し、野沢佳美 [2001] [2002] [2016] において『嘉興藏』が日本に輸入された状況およびその影響を詳細に考察している。

『嘉興藏』の目録については、野沢佳美 [2007] が7つの嘉興藏目録を比較している。中嶋隆藏 [2004] は、諸本の刻藏縁起を整理し、故宮・台湾・新文豊および日本の二藏をあわせて五つの嘉興藏目録を対照している。以上はいずれも不可欠な参考資料である。なお日本に現存する『嘉興藏』の調査報告書については、第三節で詳しく論じるため、ここでは省略する。

『嘉興藏』の刻藏事情に関しては、陳玉女 [2010] が第四、五章で五台山における刻藏環境と資源をまず考察した上で、他の出版地の社会資源と人々の願いなどをこまめに考察している。特に各段階の施刻人、刻工、校閲、書工などが表として整理され、大変便利である。その関連研究として陳玉女 [2011]、釋法幢 [2012]、李富華・何梅 [2003] が存在している。『嘉興藏』単一典籍の入藏問題については、王蕾・韓錫鐸 [2009] [2011] が、中国遼寧寧國書館の『嘉興藏』の整理を通じて興味深い問題を提示している。

『嘉興藏』の学術史については、章宏偉 [2005] がそれ以前の中国の学術研究と重要な成果を述べており有用である。大藏経の全体的な研究を行ったものに、方広鋈 [1996] [1998] [2006] [2012]、方広鋈・張賢明 [2013]、李富華・何梅 [2003]、何梅 [2014] などがある。

章宏偉 [2011] は、宮内庁に所蔵された船載書目を分析し、享保四 (1719) 年から寛保元 (1741) 年までに輸入された『嘉興藏』の数に関して、大庭氏の推論より4セットも多いことを確認している。何梅 [2014] と童瑋 [1987] はいずれも必読の参考書である。

3 『嘉興藏』の目録と時期区分

3.1 日本に広く流布する史的背景

明代私刻業と印刷業が最も発達した杭州・嘉興など江南地域の都市は、日本に輸出しやすい歴史・地理的要素を備えている。章宏偉 [2011] では、前代経験の積み重ね、紙など印刷材料の供用が充分であり、彫刻コストの低下、浙江省における科挙受験の参考書として多く購入されたこと、江浙二省に蔵書家が多く存在したこと（仏寺の蔵書も含む）、杭州・嘉興の地理的近さと交通の利便性などが、明代に杭州嘉興の民間刻書業が発達した原因として分析された。そのなかでも嘉興の楞嚴寺は、『嘉興藏』の発行によって有名であった。

明清時代、日中海上貿易の港は主に江蘇・浙江・福建あたりに集中し、寧波から長崎まで海上交通は非常に便利になり、刻本が容易に商船によって長崎までもたらされた¹⁴。特

¹⁴ 松浦章 [2011b: 389]、大庭修 [1998: 42-53] の第一章第三節唐船持渡書籍の出版地に関する記述を参

に 18 世紀以降、長崎までの中国商船の出発地は、浙江・江蘇両地に固定された¹⁵。

大庭氏は、この点に関して大庭修 [1998] において、『嘉興蔵』の刻蔵拠点が五台山から江南印刷業の盛んな嘉興に移動すること、この江南地域と日本の貿易が便利であったこととの二点を『嘉興蔵』が日本に広く流布した要因にあげている¹⁶。

江戸時代、商品経済と町人層の発展によって、印刷出版業は隆盛し、個人の刻坊が多く現れた。刻坊の漢籍刊行の先駆は、文祿五 (1596) 年小瀬甫庵の活字刊本『補注蒙求』であろう¹⁷。寛永年間以後の出版センターは寺院から京都の書肆に移動する傾向があった¹⁸。たとえば、当時僧侶の講義原稿は講義終了後まもなく刊本となり流布した。当時、鎖国政策がとられていたが、中国仏典は幕府に禁止されることなく、大量に江蘇・浙江・福建・広東から輸入され、日本の書肆店頭で直接販売され、あるいは自らも開板して江戸「覆刻本」「和刻本」として出版された。前述のように、その速さには想像を超えるものがある¹⁹。

3.2 日本の『嘉興蔵』目録と調査報告書

先行研究の指摘する通り、『嘉興蔵』の多くが中国・日本の図書館や寺院に現存しており²⁰、そのため「従来必ずしも貴重なものと見られず、研究も遅れて」いた²¹。日本でその研究に携わる者は少なく、実物による詳細な調査報告がなされた『嘉興蔵』も少ない。

3.2.1 調査報告書

筆者の知る限りでは、現在 5 種の調査報告書が出ている²²。このうち 2 種が野沢佳美 [2007] により紹介され、他 3 種が 2007 年以降、出版されている²³。以下は報告書の年代順に略説する²⁴。

A. 梅林寺本の報告書²⁵(以下梅林寺 [2000] と略す)：2000 年に出版され、目録は台湾版『中華大蔵経』(1968 年) 第一冊内の「嘉興正蔵、続蔵・又続蔵目録」に基づき対照する。刊行年以外に各巻末に附する「施財刊記」も記録される。当該蔵は正徳五 (1715) 年藩主によって贈与されたものである。45 箱、2310 冊が現存する。

照。

¹⁵ 大庭修 [1967: 10][1967: 208]、劉序楓 [1988: 133]。

¹⁶ 大庭修 [1998: 408]。

¹⁷ 蔵紹盪 [1992: 163]。

¹⁸ 野沢佳美 [2001: 46]。

¹⁹ 松浦章 [2011b] はこの好例である。

²⁰ 野沢佳美 [2002] によって、江戸時代に輸入したことが確認できるのは 30 あまりで、未確認ものを含めれば 40–50 蔵も達する。その中で有名なのが大正蔵の明版として用いられる増上寺所蔵、および鎌倉光明寺、西本願寺、奈良大和郡山市の松尾寺等である。中国の所蔵地も少なくない、王雷韓錫鐸 [2011: 126] によれば、北京故宮・首都図書館など 16 箇所に所蔵される。

²¹ 横手裕・末木文美士・渡辺麻里子・菊地大樹 [2010] の II 「序章」 p. 3(末木文美士)。この書を引用する際に、東大総合図 [2010] と略する。

²² 新研究成果があれば、ご教示いただきたい。

²³ それ以外に、『明・萬曆版大蔵経の諸相 (The varied appearances of the Banreki canon) : 秋期特別展示』(松永知海編、京都：仏教大学宗教文化ミュージアム、2014 年 3 月) も参照する必要がある。

²⁴ 一部の内容は野沢佳美 [2007] を参照した。

²⁵ 野口善敬 [2000]。

B. 稱名寺本の報告書²⁶(以下稱名寺 [2002] と略す) : 2002 年に出版され、各巻末に附する「施財刊記」は写真形式で CD-ROM に保存される。当該の『嘉興藏』は、2345 冊、10477 巻が現存する。続藏 90 函、又続藏 43 函。贈与時期は、ほぼ 18 世紀中葉と推測される。

C. 長谷寺本の報告書²⁷(以下長谷寺 [2008] と略す) : 2008 年 5 月に出版された。当該藏は、輸入時期のみならず、その経緯も明らかな藏経である。1664 年長崎より輸入され、信州松本藩主水野忠貞(石見守 1597-1670)により寛文七(1667)年に贈与された。

D. 東京大学総合図書館所蔵本の報告書²⁸(以下東大総合図 [2010] と略す) : 2010 年 9 月に出版された。I の「目録篇」と II の「研究篇」との二冊に分かれる。2005 年から 2009 年まで行われた調査による報告書である²⁹。この藏の輸入時期とその経緯も明らかである。

黄檗僧の了翁祖休(道覺, 1630-1707)は、それぞれ延寶二(1674)年に正藏を、延寶八(1680)年に続藏と又続藏を兄弟子である鐵牛道機(1628-1700)が住持する江戸白金台瑞聖寺に贈与した。「大教院」の収蔵を経て、大正十三(1924)年田健次郎により東大へ贈与され、現在東京大学総合図書館に保管される。同藏に属するのは、このほかにも 81 冊あり、現在静嘉堂文庫に所蔵される。東大総合図 [2010] I の目録篇には静嘉堂の目録も記載されているので、便宜のたため了翁藏全体を「東大本」と略す。以下の統計にも静嘉堂 81 冊が含まれている。現存する「東大本」の正藏は 1293 冊、続藏と又続藏は 603 冊で、総計 1896 冊である³⁰。なお、調査により東大本と長谷寺本の輸入年代が大変近いことも明らかになった³¹。

E. 西蓮社本の報告書³²(以下西蓮社 [2012] と略す) : 2012 年 3 月出版。西蓮社は増上寺の山内寺院とされ、寛延三(1750)年『嘉興藏』を「報恩藏」に収蔵した。増上寺の藏経管理は厳しく閲覧が制限されているが、この一藏は明版としてしばしば用いられた。大正藏にも多くの底本と校本を提供したという。

3.2.2 早期編集され、確実に記録をもつ他の目録

²⁶ 近江八幡市教育委員会文化振興課編 [2002] 『称名寺萬曆版一切経調査報告書』。

²⁷ 元興寺文化財研究所編 [2008] 『豊山長穀寺拾遺第四輯之二 明版一切経』。

²⁸ 東大総合図 [2010]。即ち、注 21 の横手裕・末木文美士・渡辺麻里子・菊地大樹 [2010] のことである。

²⁹ 筆者はこの調査に参加する機会に恵まれた。恩師である末木文美士先生、およびその際にご指導いただいた横手裕・渡辺麻里子・菊地大樹の諸先生に感謝の意を表する。

³⁰ 東大総合図 [2010] により、「正藏 1253 冊、続藏、又続藏とともに 438 冊、補遺 123 冊、総計 1814 冊」(I の第一章 p. 10) とあるが、補遺部分はそれぞれ正藏・続藏・又続藏に分類されていない。筆者は補遺分の 123 冊を野沢佳美 [2007]・中嶋隆藏 [2004] の目録に照らし合わせて、それぞれ正藏・続藏・又続藏に算入した。その結果、東大総合図書館蔵は正藏 1261 冊、続藏と又続藏小計 554 冊、静嘉堂蔵は、正藏 32 冊、続藏又続藏 49 冊。合せて正藏 1293 冊、続藏・又続藏 603 冊である。続藏・又続藏の函数については、同様に野沢佳美 [2007] の目録を対照し、続藏約 90 函、又続藏約 18 函ということがわかった。

³¹ 東大総合図 [2010: 9-19](渡辺麻里子)。

³² 會谷佳光 [2012]。

F. 法光寺本の目録：法光寺が『嘉興藏』を収蔵したことは、藤井宣正氏の記録³³によって確認された。続蔵 93 函、又続蔵 47 函。年代不詳であるが³、ほかの目録と比べると、駒澤大学図書館所蔵本に近いと予想される。

G. 興福寺本の目録：続蔵目録の記録は、「舶載書目」に残される³⁴。続蔵は元文五(1740)年入寺し、あわせて 90 函。だが正蔵目録の記録は「舶載書目」にはない。

H. 駒澤大学図書館所蔵本の目録：駒澤大学図書館所蔵の写本目録「明版大蔵経続蔵又続蔵目録」がある。野沢佳美 [2007] によれば、「天保十四(1843)年」に瑞蓮寺僧圓順がこの目録を作成したと記録されるので、その蔵経納入時期は 1843 年となる。『駒沢大学図書館所蔵禅籍善本圖録』³⁵によれば、正蔵は萬曆末の 1573–1620 年の刊行で 1444 冊、続蔵は康熙五(1666)年の刊行で 651 冊、又続蔵は康熙十五(1676)年の刊行で 401 冊。総計 2496 冊である。もとは京都瑞蓮寺に所蔵され、のち廢寺により流失、1954 年に駒澤大学図書館が書店から購入した(以下「駒大本」と略す)。

上記八蔵の基本状況については第 3.3 節で表として纏める。

3.3 日本所蔵『嘉興藏』系統の時期区分

日本の『嘉興藏』の状況は、購入・長崎入港・入寺などの要素を含むため、中国より一層複雑である。したがってまずは、『嘉興藏』の系統について大枠を設定する必要がある。その為には、変貌に至る節目あるいは区切りを確認するのが重要である。野沢佳美 [2002: 165–166] は、嘉興藏が「正蔵」、「続蔵」、「又続蔵」の順に作られたという考えのもと、「おおよそ 1640–50 年代の前期と、1680 年代後半以降の後期と二期に大別することができる」と区分した。この二期区分の理由として、後の研究で、「正蔵」と「続蔵」が同時に刊行された場合があったことを指摘している。今回、野沢氏の二期説を踏まえ、清の政治変化も視野に入れ、三期区分を提示したい。周知のとおり³⁶『嘉興藏』の「続蔵」と「又続蔵」の

³³ 藤井宣正 [1898].

³⁴ 大庭修 [1972: 29–44].

³⁵ 駒沢大学図書館編集 [2000]. 図録の解説によると、正蔵を先に彫刻し、続蔵と又続蔵をのちに補刻したとみられる。この説は、現在の多くの学者の意見と相違する。

³⁶ 章宏偉 [2005], 野沢佳美 [2007], 廖肇亨 [2008], 王蕾・韓錫鐸 [2009] [2011], 章宏偉 [2005], 釈法幢 [2014], 周斉 [2015]などを参照。唐玄宗以降、朝廷が仏教典籍の編集と入蔵に干渉し始め、仏教經典の入蔵には朝廷の許可を得る慣例が成立した(方広錡 [2012: 36])。明代・清代にも朝廷の図書検査制度と書物禁止、毀板毀書の政令がある。例えば、後表のように、康熙十六(1677)年、『嘉興藏』の『續蔵』、『又續蔵』に入蔵された 9 函の書物が撤去されるようになった。一方、これから補充し詳しく説明する。明代中後期に至ると、禪門など仏教教団における宗派意識の高まりに従って、宗門論争が漸く激しくなり、その中、もっとも注目されるのは、臨濟宗の密雲円悟(1566–1642)とその弟子の天童派と、漢月法蔵(1573–1635)とその弟子の三峰派との法争である。また、円悟弟子である費隱通容(1593–1661)によって著わされた『五燈厳統』では、天皇道悟以降の法脈を青原から南岳法嗣へ移動したことによって宗派世系をめぐって大いに論争の波乱を巻き起こし、ついに、朝廷の政治干渉をもたらした。雍正帝の干渉によって、三峰派を魔とされ、法蔵示寂 98 年後、即ち雍正十一(1733)年に法蔵門下法脈を削除し説法禁止、著作を毀板された。実は、「逃禅」(清の世俗統治を逃げ禪門に入ること)した明末遺民が多く三峰門下に入り宗派勢力が拡大しつつあるため、雍正帝がこの敵勢力を排除する政治目的が明らかである。(周斉 [2015], 廖肇亨 [2008])。乾隆帝の頃、『開元釈教録』・『略出辨偽録』・『永楽序贊文』・文人錢謙益著『楞嚴經疏解蒙鈔』等を撤去した(周斉

『嘉興蔵』と江戸仏教

入蔵書目の変遷と流通は、清の政治と密接に関連する。康熙十六(1677)年は『指月録』を含む9函が皇帝により却下され、乾隆三十四(1769)年には『楞嚴経疏解蒙鈔』(以下『蒙鈔』と略す)などが却下された³⁷。上記の二事件は蔵の枠組みにとって重要な分岐点であり、『嘉興蔵』の歴史はひとまず三段階になると考えられる。収蔵年順に各蔵を列挙し下表にまとめる³⁸。

所蔵 名称	収蔵年	続蔵 函数	又続 函数	続蔵冊/部 /巻数	又続蔵冊/ 部/巻数	全蔵 総冊数	総計部数/巻数 /函数等
長谷寺本	1667 1664 入長崎 ³⁹	未詳	未詳	未詳	未詳	1929 冊 ⁴⁰	1714 部 8341 巻
東大本	正蔵 1674 続・又続 1680	90	18	603 冊		1896 冊	正蔵 1293 冊
康熙十六(1677)年続蔵 5 函・又続蔵 4 函あわせて 9 函(『指月録』を含む)が却下 ⁴¹							
梅林寺本	1715	90	43	未詳	未詳	2310 冊	45 箱
故宮本	1723	90	43	1900 巻 253 部	1159 巻 217 部		正蔵 211 函 7829 巻 1665 部 ⁴²
興福寺本	1740	90	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳
稱名寺本	1750 前後	90	43	未詳	未詳	2345 冊	10477 巻
西蓮社本	1750	未詳	未詳	668 冊	263 冊	2385 冊	正蔵 1454 冊
乾隆三十四(1769)年『楞嚴経疏解蒙鈔』(以下『蒙鈔』と略称)などが却下							
駒大本	1843 年前	93	47	651 冊	401 冊	2496 冊	正蔵 1444 冊
法光寺本	未詳	93	47	693 冊 278 部 1833 巻	412 冊 260 部 1246 巻	未詳	続蔵又続 共 1105 冊

第一段階には、長谷寺本と東大本が含まれる。両者は同時期に日本に入り、17世紀後半の特徴をもつ二蔵である。渡辺氏の調査によると、東大本は今まで発見されたものの中では早期に輸入された蔵経であり、日本に輸入されてから近代までの軌跡が非常にはっきりしたものであるという。ここに東大本の特色と意義があるという⁴³。長谷寺本も恐らく同様な意味を持つであろう。

[2015: 225]。清初の僧諱については、陳垣[1941]、長谷部幽溪[1993]などを参照。「逃禪」については、陳垣[1940]、周斉[2015]、廖肇亨[2008]などを参照。

³⁷ 嘉興蔵入蔵書目の変遷は、各寺の刊行・販売の状況、清代政治の変化などが織り込まれ、大変複雑である。少なくとも、続蔵経では90函から93函、又続蔵経では43函から47函という変化があった。後述を参照。

³⁸ 正蔵の函数はほぼ変わらず211函であるため、この部分は略す。

³⁹ 長谷寺[2008]坪井清足の序文。

⁴⁰ 長谷寺[2008: 23]に言及された「豊山文庫本」の同蔵19冊も記入する。

⁴¹ 章宏偉[2005: 544]。

⁴² 楊玉良の統計による。

⁴³ 東大総合図[2010]のII, p. 18。また、野沢氏は『指月録』の有無は、続蔵の判断に重要であるとの教示をくださった。

第二段階には、梅林寺など五蔵があり、18世紀前半(1769)までには成立した構成である。第三段階は、駒大本の時期である(法光寺本は収蔵年未詳のため暫定的に第三段階に含める)。その理由は、続蔵と又続蔵が、それぞれ90函から93函へ、43函から47函へ増加していることによる。

前述のように、構成が複雑な『嘉興蔵』系統のうち、とくに「続蔵」「又続蔵」の部分は、今までの研究による限り、書目内容は流動的・持続的に更新されてきたので、開放的な系統といえよう。これから日本でも中国でも、現代に残された『嘉興蔵』が、続々と新しく発見される可能性があり、その時期・枠組みなど所属の系統を判断する際に、上記の区切り点は参考になろう。

4 鳳潭僧濬の『扶桑蔵外現存目録』に見られる『嘉興蔵』の流布

さて、『嘉興蔵』が日本に輸入されてから、その流布・受容の状況はどうであったのだろうか。以下、鳳潭の『扶桑蔵外現存目録』⁴⁴(以下『扶桑』と略す)を糸口として、『嘉興蔵』の「続蔵」「又続蔵」の書肆における流通状況を考察していきたい。

仏教史料に関して、日本では、時間的にみても空間的にみても、近世には仏教資料が豊富に保有されていた。時間上、古くから各時期の写本や刊本が伝えられている。空間上、朝鮮半島・中国南北各地方から資料が伝えられている。さらに、江戸時代は印刷業が隆盛期に入り、京都では印坊も多く、刊本が大いに増加した。結果的に、同一仏典に、異なった時空の版本があるため校勘が可能になり、学術活動を大いに促進することになった⁴⁵。

『嘉興蔵』も日本に入ってから、正蔵部分は、天海版と黄檗版の基となり、続蔵・又続蔵部分は民間に渡り書肆で流通した。資料の入手は、伝統的には寺院の写本であったが、江戸に入ってから京都の書肆からも購入できるようになり、仏典の研究にも寄与した。

4.1 『扶桑蔵外現存目録』について

鳳潭僧濬(1659-1738)は、黄檗宗鉄眼道光の弟子で、鉄眼版一切経の開版に助力したことが彼の伝記に記録されている。鉄眼の没後も、古逸仏典を収集したり目録を作ったり版行したりした⁴⁶。なおかつ、彼は当時大いに活躍した学問僧であることも知られている。

『扶桑蔵外現存目録』に関する先行研究はほぼ存在せず、高橋正隆[1980]は参考にするのできる唯一のものである。

編集年代について、「浪華鳳潭」という著者名から1715年前に作られたと推測される⁴⁷。記録された書物は全部で751種である。

資料の所蔵先については、以下の表記が存在する。

1. 「黄檗」「拇尾」「興聖」。寺院名。
2. 「経直画一目録」。続蔵・又続蔵部分。

⁴⁴ 『昭和法宝総目録』第2冊に所収。先行研究はほぼなし、高橋正隆[1981]は近いものである。

⁴⁵ 例えば、曹洞五位釈について、鳳潭はわりに古層の朝鮮本を利用して、永覚元賢の抄録は明末の誤伝だと判断した。詳細は、王芳[2008]を参照。

⁴⁶ 例えば大正蔵50冊No.2054「法蔵伝」の刊行に力を入れた。

⁴⁷ 王芳[2012]。

3. 「南京」⁴⁸. 南京は、①「南京船」つまり中国からの貿易船を指す。②長崎の中国寺である興福寺、「南京寺」の所蔵を指すこともあろう。いずれにしても、中国から輸入した書を指すことは間違いないだろう。
4. 「朝鮮」「海東」.
5. 「現存」「現在」. 恐らく彼が収集し手元にあったもの。
6. 「肆」. 書肆から入手できたものであり、最も多い。

よって、ある書名の下に「画一」と「肆」(「肆刊」「肆刻」「肆鏤」「肆」)の両方が表記されていること、あるいは「画一」と記していないが、明らかに「続蔵」「又続蔵」に属する著作の下に「刊」と注記されていることにより、「続蔵」「又続蔵」の単行本は1715年前に書肆で流通していたことが窺えよう。

筆者が、扶桑北京故宮本目録と対照し、江戸書肆で流通していた「続蔵」「又続蔵」の書籍を数えたところ、合せて94種にも至った(本稿の付録を参照)。

4.2 この付録から確認できる事項

『嘉興蔵』の続蔵と又続蔵に属する書籍のうち、確実に日本の書肆で販売または覆刻されたのは94種であり、扶桑全目録751種の12.5%を占める。南京本の47種を加えると141種になり、全体の19%、ほぼ二割を占めたのである。これは、あくまでも1715年前の仏教系書籍の日本受容に限って見た場合である。それ以降は、『嘉興蔵』の輸入が盛んになり⁴⁹、章宏偉[2011]は、1719年から1741年までの22年間に9部輸入されたことを推測する。江戸時代における出版業の隆盛との相乗効果により、『嘉興蔵』の単行本が江戸時代の僧侶に読まれる機会が一層多くなったものと思われる。

『扶桑』の記録によって、日本の書肆に流通した「明末四大高僧」と呼ばれる(以下「四僧」と略す)憨山德清(1546–1623)、雲棲殊宏(1535–1615)、紫柏真可(1543–1603)、藕益智旭(1599–1655)の4人の著作は合計35種もあった。そのうち、27種は続蔵・又続蔵に所収され、上記94種の29%、ほぼ三割を占めた。他の8種は『嘉興蔵』には入蔵していなかったが、江戸の書肆で販売された。18世紀初期に活躍した「四僧」の著作が日本にいち早く受容されかつ読まれたことが確認できる⁵⁰。なお、江戸の知識人は明・清初の著作に大変興味を示したことが明らかであり、弥吉光長氏「中国からの輸入唐本では特に明か

⁴⁸ 南京は、「南京船」つまり中国江南地域からの貿易船を指すか、あるいは長崎の中国寺興福寺「南京寺」の所蔵を指す。いずれにしても、中国から輸入した書を指すことは間違いないだろう。ここでは、「南京船」と理解されてよいであろうか。松浦章[2011a: 349]によると、17–18世紀の日本では「南京とするが、現在の南京としての地名より「南京省」として清代前期の江南省や後期の江蘇省の意味で南京が使われていた」。南京船について、『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』の資料を引用し「長崎に来航する南京船とは必ずしも現在の南京から来航したのではなく、長江下流域の港から来航する船を総称して南京船と呼称していたことがわかる。以後に述べるオランダ商館記録でも南京船と呼称されているほとんどの船が、このような江南地域からの船を指している」という。松浦氏の説は、大庭修[1998]の附篇第二章第六節における唐船の出発港と航行時間に関する結論と呼応する。

⁴⁹ 章宏偉[2011]は、1719年から1741年までの22年間、9部の輸入が推測される。

⁵⁰ 雲棲殊宏の日本受容と影響については、西村玲[2014a][2014b]を参照。西村氏は2016年2月になくなり、生前よく指導を頂きご恩を忘れない。

ら清初の学者の説は喜ばれる」という説に一致する⁵¹。

興味深いことに、その 35 種の中、書肆に流布された藕益智旭の著作は、17 種もあり(文後の附録を参照)、「四僧」のほぼ半分を占める。「四僧」のうち、智旭以外の三僧は中国ではすでに「万曆三高僧」として有名となり、著作はよく読まれたが、智旭は当時の明清仏教界ではそれほど注目されてはいなかった⁵²。だが、1715 年までに没後六十年しか立っていないのに、日本では彼の著作はかなり人気を得ていたのである。

鳳潭は中国撰述の典籍、とくに明代僧の著作を多く収集し重視した。実際、自著の中に明代僧の著作がよく引用・論及されている⁵³。黄檗禅の弟子だった彼は、明らかに明代仏教の影響を強くうけ、彼の仏教理解には総合仏教の特質が一貫してみられる。『扶桑』は単に目録であるだけでなく、彼の読書リストにも当たるのではないだろうか。

5 終わりに

『嘉興蔵』は、初めての流通しやすい中国大蔵経として日本で受容された。日中文化交流の典型でもあり、中国で刊刻されてからすぐに日本に多く輸入され、その規模は前代未聞であった。その流通状況と深い影響力は、先行研究で指摘されている通りである。単行本は日本の書肆で販売され、和刻本、覆刻本としても出回り、日本近世の学問と仏教研究に大いに貢献した。最近の研究では、大正蔵との関わりが予想より大きかったことが明らかにされている⁵⁴。

『嘉興蔵』の構成は、従前の大蔵経よりも複雑であり、本稿で提示した三段階の時期区分は、日本に所蔵された『嘉興蔵』の分類整理・系統検討に有益であろう。

鳳潭の『扶桑』を考察したことから、日本近世において中国撰述の統蔵と又統蔵が日本の書肆で人気があり、一時期日本で幅広く受容されたことがわかった。それは黄檗宗渡来と関係があると推測される。近世仏教には幕府の仏教学問推奨、古来伝えられた多様な資料、『嘉興蔵』の輸入による明代仏教の刺激、出版業の隆盛、僧侶自身の革新の意識など様々なことが織り込まれていた。よって、仏教に関する当時の学問的営為は、「墮落」という一般的な近世仏教のイメージよりも豊かな多面性をもっていたといえる。

⁵¹ 弥吉光長 [1988: 120-121].

⁵² 廖肇亨 [2014: 115] には、「在明清仏教思想版図上、藕益智旭是個局外人 (outsider)」とある。また廖肇亨 [2014: 117] には「不過、就現實處境來說、原來一代天台巨擘竟不是天台宗人、但却更符合我們最初的觀察：藕益智旭一直是個局外人、不在任何主流脈絡之内」とある。つまり、智旭は同時代の中国仏教界は、outsider のような者でそれほど重視されてなかった。なお、日本で始めて人気を得て、のち中国に「逆輸入」されて重視され、漸く他の三僧の名と並び、「四大」になったであろうという論を、初めて提示されたのも廖氏である。

⁵³ 禅に関する論著『鉄壁雲片』には、大量に嘉興蔵の統蔵と又統蔵における明代禅僧の撰述、特に始めて入蔵された語録などがよく引用されている。たとえば、三峰和尚、櫻寧静禅師、永覚元賢などが挙げられる。

⁵⁴ 永崎研宣 [2014: 56] は、「『縮刷蔵』は山崎精華が述懐されるように、その拡大版である頻伽精舎本を通じて大正蔵の原稿となっている」と指摘している。その上でいくつかの例をあげ、大正蔵とその原稿になっている縮刷蔵 (1880-1885 編修) との間には、従来の予想以上の関係があると示唆している。しかるに、縮刷蔵は鉄眼版 (1669-1681 開版) を原本とし、鉄眼版は嘉興蔵の覆刻本である。つまり、嘉興蔵→鉄眼版→縮刷蔵→大正蔵という系統になっており、嘉興蔵は大正蔵の「明版校訂本」という役割のみではないようである。これからは、両者の関係についてより詳細な考察が必要であろう。

今後の課題としては、鳳潭と同時期の僧侶はどのような問題意識で『嘉興藏』を引用・言及し、どのように『嘉興藏』を利用したか、それと関連して人気作である智旭のものはどのように読まれたのか、などを考えていきたい⁵⁵。

付録

『扶桑藏外現存目録』における江戸書肆で刊行・販売された『嘉興藏』の「続藏」「又続藏」書目(北京故宮本の原文を録するので便宜上に旧字を使う)。

序号 筆者がつけた順番で、一種の典籍は一つの数字に対応する。

経号 法宝総目録における『扶桑』最上欄の数字。

内容 故宮本の説明を録する。故宮本が欠あるいは未検出の場合、『扶桑』から採録し、下線を付した。たとえば、7番、25番などこれに属する。智旭の著作は、太字で示し、合計17種である。

序号	経号	内容
1	71	即仏遺教經註一卷 明釋永祥撰 明崇禎十一年武林釋海珍等刻本 三四・統四七
2-3	80	楞伽阿跋多羅寶經義疏四卷 劉宋釋求那跋陀羅譯經 明釋智旭疏義 清初夏之鼎刻本 四冊 三一・統二八 楞伽阿跋多羅寶經玄義一卷 明釋智旭撰 明末釋寂惺刻本 一冊 三一・統二九
4	87	大仏頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經合論十卷 宋釋德洪撰 明萬曆十七年金壇王肯堂刻本四冊 二八・統二六
5	88	大仏頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經要解二十卷 宋釋戒環撰 明萬曆二十一年二十二年泗州釋行久刻本 四冊 二七・統二三
6	89	大仏頂首楞嚴經玄義四卷 明釋傳燈撰 明萬曆二十五年釋正氣等刻本 二冊 二八・統二五
7	90	<u>楞嚴經圓通疏 十卷 釋天如會解 傳燈</u>
8	91	大仏頂首楞嚴經正脈疏十卷 附懸示一卷 科文一卷 明釋真鑑撰 明萬曆二十四至四十一年沈演等刻本 十二冊 二二—二三・統一九
9-10	95	大仏頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經文句十卷 明釋智旭撰 明崇禎年刻本 五冊 二六・統二一 大仏頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經玄義二卷 明釋智旭撰 明崇禎十七年刻本 一冊 二六・統二二
11	96	楞嚴經疏解蒙鈔 清錢謙益撰 明末清初刻本十冊 乾隆三十四年「奉旨」撤出 二九—三〇
12	157	三經解三卷 明釋智旭撰 清順治五年嘉興楞嚴寺刻本 一冊 仏說四十二章經解一卷 明釋智旭撰 仏遺教經解一卷 明釋智旭撰 八大人覺經略解一卷 漢釋 安世高譯 明釋智旭解 三八・統七七

⁵⁵ 本稿の作成についてご指導ご協力を頂いた方広鋁、裴輪顯量、廖肇亨、池麗梅、柳幹康、西野翠の各先生方に深く感謝する。

13	159	仏說四十二章經註一卷 明釋永祥撰 明崇禎十一年武林釋海珍等刻本 一冊 三四・統四八
14	162	仏說齋經科註一卷 吳優婆塞支謙譯 明釋智旭科註 明末清初釋智勝刻本 一冊 三八・統七八
15	163	<u>占察經玄義疏三卷藕益</u>
16	167	仏說盂蘭盆經新疏一卷 明釋智旭撰 明末清初刻本 一冊 四二・統一〇一
17	178	大方廣仏華嚴經疏鈔八十卷 附大方廣仏華嚴經普賢行願品疏一卷 大方廣仏華嚴經 疏鈔音釋一卷 唐釋澄觀撰 明天啓二至六年楊華等刻本 五十六冊 二一一八・統二
18	193	大方廣仏華嚴經合論一百二十卷 李通玄造論釋志寧合論 明萬曆十九年聊城傅光宅 等刻清康熙九年四十七年遞修本 二十四冊 九一一一・統三
19	194	略釋新華嚴經修行次第決疑論四卷 唐李通玄撰明萬曆十八年常熟翟汝稷等刻清 康熙二十一年重修本 一冊 一八・統七
20	195	解迷顯智成悲十明論一卷 唐李通玄撰 明萬曆二十年宜興吳達可刻清康熙十九年 契禪契穎重修本 一八・統八
21	196	大方廣仏華嚴經吞海集三卷 宋釋道通撰 明萬曆十九年吳興吳正志刻清康熙十九 二十年遞修本 一八・統九
22	198	大方廣仏華嚴經普賢行願品別行疏鈔六卷 附華嚴宗七祖一卷 唐釋澄觀撰疏 唐釋宗密撰隨疏鈔 明崇禎十五年嘉定縣羌世隆刻本 四冊 一八・統六
23	219	大方廣圓覺修多羅了義經要解二卷 唐釋仏多羅譯 明釋寂正要解 明萬曆 四十五年刻本 一冊 三二・統三二
24	221	朝華嚴經持驗紀一卷 清周克復撰 清初刻本 一冊 三五・統五一
25	273	<u>三千有門頌解一卷 附藕益三頌一卷 藕益較</u>
26-27	281	妙法蓮華經台宗會義十六卷 明釋智旭撰 清順治七年釋修如等刻本 八冊 一九・統一一 妙蓮華經綸貫一卷 明釋智旭撰 清初嘉興吳智印刻本 一九・統一二
28	283	妙法蓮法經合論七卷 宋釋惠洪撰 張商英附論 明萬曆十三年馮夢禎等刻本 四冊 二一・統一五
29	284	法華大意三卷 明釋無相撰 明天啓七年葉祺胤刻本 一冊 二一・統一六
30	285	妙法蓮華經意語一卷 明釋湛然澄撰 釋明海重訂 明崇禎三年釋成溶等刻本 一冊 二一・統一七
31-33	290	金光明懺法補助儀一卷 宋釋遵式集 明釋智旭重編 明崇禎七年陳淨柱刻本 三六・統六四 占察善惡業報經行法一卷 附懺壇中齋儀 明釋智旭集 明崇禎年刻本 三六・統六六 讚禮地藏菩薩懺願儀一卷 明釋智旭撰 明崇禎十年 釋圖果等刻本 一冊 三六・統六七
34	396	相宗八要解八卷 明釋明撰 明萬曆四十年顏俊英等刻本 二冊 三九・統八三
35	397	相宗八要直解八卷 明釋智旭撰 (中略) 三九・統八四
36	401	<u>百法明門論纂</u>

『嘉興藏』と江戸仏教

37	402	成唯識論俗詮十卷 唐釋玄奘譯 明釋明撰 明萬曆四十一年皖城吳用先刻本 五冊 四六・統一一一
38	412	大乘起信論袞網疏六卷 明釋智旭撰 明末清初刻本 二冊 四二・統九七
39	452	統原教論二卷 明沈士榮撰 明萬曆十九年崑山顧紹芳刻清康熙二十年重修本 一冊 四二・統九八
40	453	道餘錄一卷 明姚廣孝撰 李[執*/目] 明萬曆四十七年海虞錢謙益刻本 一冊 四二・統九九
41	454	寂音尊者智證傳十卷 附雲巖寶鏡三昧一卷 宋釋覺範撰 釋覺慈編 明萬曆十三年釋 真可刻崇禎三年增修本 一冊 四四・統一〇六
42	455	大明高僧傳八卷 明釋如惺撰 明萬曆四十五年嘉興釋普文刻本一冊 四四・統一〇八
43	458	宋文憲公護法錄十卷 明宋濂撰 釋殊宏編 錢謙益訂 明天啓一至三年海虞楊彝刻本 四冊 五〇・統一一六
44	480	仏説阿彌陀經疏鈔四卷 清釋殊宏撰 清康熙十年嘉興楞嚴寺刻本 四冊 有圖九幅 八八・統二五〇
45	484	歸元直指集二卷 明釋一元宗本編 清康熙十四年嘉興楞嚴寺刻本 二冊 五一・統一一八
46-47	486	往生集 5 卷 附自知錄一卷 雲棲殊宏
48	488	淨土指歸集二卷 清釋大佑集 清康熙十年嘉興楞嚴寺刻本二冊 四一・統九一
49	489	師子林天如和尚淨土或問一卷 清釋善遇編 清順治三年刻本 四一・統九二
50	490	幽溪無盡大師淨土法語一卷 清釋正知編 清順治四年自刻本一冊 四一・統九三
51	491	龍舒增廣淨土文十二卷 王日休撰 明萬曆二十一年張守約刻本 二冊 四一・統九五
52	494	仏説阿彌陀經要解一卷 姚秦釋鳩摩羅什譯 明釋智旭解 清初沈純祉刻本 四〇・統 八六
53	495	仏説阿彌經句解一卷 元釋性澄撰 明末清初程世采等萬刻本一冊 四〇・統八七
54	496	寶王三昧念仏直指二卷 附破妄念仏説一卷 明釋妙計 ⁵⁷ 集 清初刻本一冊 四〇・統 八八
55	497	西方直指三卷 録田一念編 明萬曆三十四年刻本 一冊 四〇・統八九
56	500	西方合論十卷 清釋后順撰 清康熙十六年 嘉興楞嚴寺刻本 二冊 又四・又四
57	507	淨土晨鐘十卷 附淨土日誦一卷 清周克復撰 清順治十六年刻本二冊 三五・統五五
58	573	仏果園悟禪師碧岩集十卷 釋仏果園悟撰 吳自弘校 釋性湛清順治十一—十一年嘉 興楞嚴寺刻本 四冊 五一・統一一九
59	574	空谷集三卷 評投子義青 林泉
60	575	虛堂集三卷 評丹霞淳頌 林泉
61	576	請益錄 二卷 評天童覺頌 萬松
62	577	從容錄 三卷 評天童覺頌 萬松
63	579	正法眼藏三卷 宋釋宗杲撰 徐弘沢校 明萬曆四十四年刻本三冊 五八・統一三六
64	580	人天眼目六卷 宋釋智昭撰 清順治三年嘉興府楞嚴寺刻本 一冊 五八・統一三七

⁵⁷『扶桑』の中に、「叶」となる。

65	586	五燈會元二十卷 目錄二卷 不著撰者名氏 明萬曆三十八—一四十年丹陽賀懋熙等刻本 十四冊 六〇—一六一·統一四一
66	588	禪宗正脈
67	592 594	禪林僧寶傳三十卷 附臨濟宗旨一卷 宋釋惠洪撰 明末刻本三冊 四四·統一〇七 弘法金湯編十六卷 明釋心泰編 明萬曆二十八年刻本 三冊 五〇·統一一七
68	602	五家語錄五卷 明釋慧然等編 郭凝之重訂 明崇禎三年刻本 三冊 《臨濟宗》(義玄禪師)一卷 《仰宗》(山祐禪師, 仰山慧寂禪師)一卷 《洞曹宗》(瑞州洞山良價禪師, 撫州曹山本寂禪師)一卷 《法眼宗》(金陵清凉院文益禪師)一卷 《雲門宗》(韶州雲門匡真文偃禪師)一卷 五八·統一三九
69	620	日叢普照慧辯楚石禪師語錄二十卷 元釋梵撰 釋祖光等編 明萬曆十八年平湖陸光祖等刻本 四冊 六二·統一四四
70	625	高峰大師語錄一卷 元釋原妙撰 清康熙六年 嘉興楞嚴寺刻本一冊 六四·統一五一
71	629	福源石屋禪師語錄二卷 元釋清撰 釋至柔等編 明天啓七年吳江張大梁刻本 一冊 六五·統一五八
72	634	恕中和尚語錄六卷 明釋無愠撰 宗黼等編 明萬曆二十六年金壇于玉立等刻本 二冊 六六·統一六三
73	640	龍池幻有禪師語錄十二卷 明釋一心撰, 釋圓悟, 圓修等編 附錄一卷 明釋殊宏, 德清周汝登撰 明崇禎十一年嘉興楞嚴寺刻本三冊 六八·統一七五
74	641	密雲禪師語錄 二十卷 圓悟
75	644	會稽雲門湛然澄禪師語錄八卷 明釋圓澄撰 丁元公祁駿佳編 附行一卷 明傅馨撰 塔銘一卷 明陶 爽齡, 陳懿典撰 明崇禎年刻本 二冊 七〇·統一七八
76	645	壽昌無明和尚語錄二卷 明釋慧經撰 釋元來編附題無明和尚真贊並引一卷 塔銘一卷 明釋德清撰 明崇禎十年豫章端伯刻本 一冊 七〇·統一七九
77	646	頓悟入道要門論一卷 緒方門人參問語錄一卷 唐釋慧海撰 明萬曆二十五年吳江吳瑞徵刻本 一冊 五七·統一三五
78	647	林間錄二卷 林間錄後集一卷 宋釋惠洪撰 明萬曆十二年馮夢禎重刻本 一冊 五八·統一三八
79	648	註心賦四卷 宋釋延壽撰 明崇禎元年—一七年丹陽賀焜刻本一冊 四二·統一〇〇
80	649	天樂鳴空集三卷 明鮑宗肇撰 釋智旭定 明萬曆三十八年沈純祉等刻清順治十年重印本 一冊 四三·統一〇三
81	654	憨山老人夢遊全集五卷 明釋德清撰 釋福善編 明崇禎二年江洲左春魁刻本 三冊 五五·統一二三
82	660	石門文字禪三十卷 宋釋德洪撰 釋覺慈編 明萬曆二十五年金壇于玉立等刻, 清康熙十九年二十年二十一年遞修本 六冊 五九·統一四〇
83	661	羅湖野錄二卷 宋釋曉瑩撰 明萬曆二十九年金壇于玉立刻本 一冊 六四·統一五六
84	662	弘法戒儀二卷 三峰法藏
85	666	寶鏡三昧本義一卷 荆溪行策
86	699	禪林寶訓合註四卷 宋釋妙喜, 竹菴合撰, 明釋淨善重編, 清張文嘉較 附禪林寶訓拈頌一卷 清釋行盛撰 張文嘉, 顧如晉較清康熙七年嘉興楞嚴寺刻本 二冊 八三·統一二二

『嘉興藏』と江戸仏教

87	703	費隱禪師語録十四卷 清釋通容撰 釋隆等編 福巖費隱容禪師紀年録二卷 清釋資福王谷輯 清康熙初年刻本四冊 七一・統一八四
88	714	隱元禪師語録十六卷 明釋黄檗撰 清釋海寧等編 清順治十至十三年釋性宗刻本四冊 七七・統一九八
89	718	博山無異大師語録集要六卷 明釋成正録, 釋元賢編 明崇禎年刻本二冊 七八・統二〇二
91	721	永覺和尚廣録三十卷 清釋元賢撰 釋道需重編 永覺賢公和尚行業曲記一卷 清林之番撰 鼓山永覺老人傳一卷 清釋道靖撰清順治年刻本六冊 七九・統二〇五
92	729	伏獅祇園禪師語録二卷 清釋行剛撰 釋授遠超宿等編 附伏獅祇園剛禪師行一卷 清釋超撰 塔銘一卷 清吳鑄撰 清順治年刻本一冊 八二・統二一四
93	744	仏説孟蘭盆經折中疏一卷 附科一卷 清釋靈耀撰 清康熙年刻本一冊 又二七・又一一
94	745	集註節義一卷 附科一卷 清釋靈耀撰 清康熙年刻本 又二七・又一一八

(参考文献)

- 會谷佳光 [2012] 『西蓮社(舊三縁山増上寺山内寺院報恩蔵)収蔵嘉興版大蔵経目録』東京：西蓮社。
- 大庭修 [1967] 『江戸時代における唐船持渡書の研究』吹田：関西大学東西学術研究所。
- 大庭修 [1972] 『宮内庁書陵部蔵舶載書目(上)(下)』吹田：関西大学東西学術研究所。
王勇・大庭修
[1996] 『中日文化交流史大系9典籍巻』杭州：浙江人民出版社。
- 大庭修(戚印平・王勇・王宝平訳)
[1998] 『江戸時代中国典籍流播日本之研究』杭州：杭州大学出版。(大庭修[1967]『江戸時代における唐船持渡書の研究』大阪：関西大学出版部。)
- 近江八幡市教育委員会文化振興課
[2002] 『称名寺萬曆版一切経調査報告書』近江八幡：近江八幡市教育委員会。
- 何梅 [2014] 『代漢文仏教大蔵経目録新考』北京：社会科学文献出版社。
- 韓錫鐸 [2008] 『『嘉興藏』各本異同略述』『文献季刊』2008年第2号, pp. 181-183。
元興寺文化財研究所
[2008] 『豊山長谷寺拾遺第四輯之二 明版一切経』奈良：総本山長谷寺文化財等保存調査委員会。
- 嚴紹盪 [1992] 『漢籍在日本の流布研究』南京：江蘇古籍出版社。
駒沢大学図書館
[2000] 『禅籍善本図録：駒沢大学図書館所蔵』東京：駒沢大学図書館。
- 釋法幢 [2012] 「徑山刻藏考述」『中華佛学研究』第13期, pp. 53-89。
[2014] 「明清之際『嘉興藏』刊印流通始末因縁」『中国仏学』第34期, pp. 23-40。

- 周 齊 [2015] 『清代仏教と政治文化』 北京：人民出版社。
- 章宏偉 [2004] 「方冊藏の刊刻與明代官版大藏經」『明清論叢』第五輯，北京：紫禁城出版。
- [2005] 「故宮博物院藏『嘉興藏』の価値—從『嘉興藏』學術研究史角度來探討」『故宮學刊』2004年總第1輯創刊号，北京：故宮博物院紫禁城出版。
- [2011] 『十六—十九世紀中国出版研究』上海：上海人民出版社。
- 高橋正隆 [1980] 「鳳潭の『扶桑続入総目録』について」『大谷学報』60卷第4号，pp. 25-37。
- 陳玉女 [2010] 『明代佛門内外僧俗交の場域』台北：稻郷出版社，2010年6月。
- [2011] 「明羅教和佛教勢力的相依與對峙-以《五部六冊》和《嘉興藏》刊刻為例」，台湾成功大学『歴史学報』第40号，pp. 93-128。
- 中嶋隆藏 [2004] 『明萬曆嘉興藏の出版とその影響』，(平成13-16年度科学研究費補助金研究成果報告，研究課題番号：13021204)，出版地出版社未檢。
- 永崎研宣 [2014] 「デジタル化の現場から見えてくる大正新修大藏經」『平成26年度秋期特別展関連シンポジウム「縮刷藏經から大正藏經へ」』會議論文集，京都：仏教大学宗教文化ミュージアム，pp. 54-61。
- 西村玲 [2014a] 「日本近世における不殺生思想：雲棲殊宏の受容と影響」『印度学仏教学研究』第62(2)号，pp. 225-229。
- [2014b] 「明末の不殺放生思想の日本受容：雲棲殊宏と江戸仏教」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』東京：佼成出版社。
- 野口善敬 [2000] 「江南山梅林寺所藏嘉興大藏經目録」『江南山梅林寺所藏典籍・文書総合録』久留米：江南山梅林寺。
- 野沢佳美 [2001] 「江戸時代における明版嘉興藏輸入の影響について」『立正大学東洋史論集』第13号，立正大学東洋史研究会，pp. 40-55。
- [2002] 「江戸時代における明版嘉興藏の輸入状況について」『佐々木孝憲博士古稀記念仏教学仏教史論集：佐々木孝憲博士古稀記念論集』東京：山喜房仏書林，pp. 157-170。
- [2007] 「明版嘉興藏の続藏・又続藏の構成について」『立正史学』第101号，pp. 17-47。
- [2016] 「江戸時代における明版嘉興藏の輸入状況について」『立正史学』第119号，pp. 77-99。
- 韓錫鐸 [2008] 『嘉興藏』各本異同略述』『文献季刊』2008年第2号，pp. 181-183。
- 松浦章 [2011a] 「朱舜水日本来航時の日中文化交流」『東アジア文化交渉研究』第4号，東京：立正大学史学会，pp. 345-371。
- [2011b] 『清嘉録』の日本船載と和刻本の流布』『東アジア文化交渉研究』第4号，pp. 373-389。
- 横手裕・末木文美士・渡辺麻里子・菊地大樹 [2010] 『東京大学総合図書館所藏万曆版大藏經目録と研究』(平成17年度

～平成 21 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」仏教道交交渉班「宋元明における仏教道交交渉と日本宗教・思想」東京：東京大学。

- 藤井宣正 [1898] 「大日本現存支那版三藏經統藏又統藏帙冊部卷数表」『現存日本大藏經冠字目録』, 京都：貝葉書院。
- 方広鋳 [1996] 「海外大藏經編輯及電子版大藏經的情況」『法音』1996 年第 5 期, pp. 3-11.
- [1998] 「金陵刻經處與方冊本藏經」『法音』1998 年第 5 期, pp. 26-30.
- [2006] 敦煌遺書與奈良平安寫經, 『敦煌研究』2006 年第 6 期, pp. 139-145+pp. 230-231.
- [2012] 「略談漢文大藏經的編藏理路及其演變」『世界宗教研究』2012 年第 1 期, pp. 32-41.
- 方広鋳, 張賢明 [2013] 「中国刻本藏經対高麗藏的影響」『世界宗教研究』2013 年第 2 期, pp. 9-15.
- 弥吉光長 [1988] 『大坂の本屋と唐本の輸入：未刊史料による日本出版文化第二卷』東京：ゆまに書房。
- 藍吉富 [1993] 「『嘉興藏』研究」『中国仏教泛論』台北：新文豐出版。
- [2004] 「嘉興大藏經的特色及其史料價值」『仏教的思想與文化印順導師八秩晋六寿慶論文集』pp. 255-266.
- 李富華, 何梅 [2003] 『漢文仏教大藏經研究』第十章「關於嘉興藏的研究」北京：宗教文化出版社, pp. 465-509.
- 劉序楓 [1988] 「清代前期の福建商人と長崎貿易」『九州大学東洋史論集』第 16 号, pp. 133-161.
- 廖肇亨 [2008] 『中辺詩禪夢戲：明末清初仏教文化論述の呈現與關懷』台北：允晨文化。
- [2014] 『巨浪洄瀾：明清仏門人物群像及其芸文』台北：法鼓文化出版社。
- 王芳 [2008] 「鳳潭と永覚元賢の曹洞偏正五位理解について」『インド哲学仏教学研究』第 15 号, pp. 131-143.
- [2012] 「鳳潭の生没年および出生地に対する一考察」『インド哲学仏教学研究』第 19 号, pp. 119-138.
- 王蕾, 韓錫鐸 [2009] 「從遼圖藏本認識『嘉興藏』」『中国典籍與文化』2009 年第 1 期, pp. 67-70.
- [2011] 「關於嘉興藏的幾個問題」『圖書館學刊』2011 年第 5 期, pp. 120-122, p. 126.

王 芳

〈Keywords〉 嘉興葺, 統葺, 又統葺, 扶桑葺外現存目錄, 鳳潭僧濬

わん ふあん 台湾中央研究院中国文哲研究所

Jiaxing Tripiṭaka and the Buddhism of the Edo Period:
a Focus on the *Fusō Zōgai Genzon Mokuroku* edited by Hōtan Sōshun

WANG, Fang

The Buddhist works were popular among the imported Chinese books in the Edo period (江戸時代 Edo Jidai) of Japan. The import of the Chinese Buddhist Canon *Jiaxing Tripiṭaka* (嘉興藏) exerted a considerable influence on the Buddhism of the Edo Period. As *Jiaxing Tripiṭaka*'s publication is an open and changing process which lasts nearly one century, it becomes necessary to make a chronological 3-phase classification for its publication and overseas transmission. This paper draws upon the information of Buddhist publications of the Edo bookstores in the *Fusō Zōgai Genzon Mokuroku* (扶桑藏外現存目錄, the list of non- Tripiṭaka Buddhist works in Japan) which is closely concerned with the 2 parts of *Ji-axing Tripiṭaka-Xuzang* (続藏 Zokuzō Kyō) and *Youxuzang* (又続藏 Mata-Zokuzō Kyō), to examine the Buddhist monks' and intellectuals' acceptance of *Jiaxing Tripiṭaka*. The *Fusō Zōgai Genzon Mokuroku* is edited by Hōtan Sōshun (鳳潭僧濬), a renowned Buddhist monk of the Edo period. It is clarified that the people at the time show great interests on the Buddhist works written in the Ming period of China.